



Title	「我が国の言語文化」としての長崎方言を学び、地域と歴史への理解を深め、表現力を高める小学校国語授業の研究
Author(s)	前田, 桂子; 平瀬, 正賢; 橋元, 良太
Citation	長崎大学教育学部教育実践研究紀要, 18, pp.1-10; 2019
Issue Date	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/39071
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-25T10:15:46Z

「我が国の言語文化」としての長崎方言を学び、地域と歴史への理解を深め、表現力を高める小学校国語授業の研究

前田桂子・平瀬正賢(長崎大学教育学部)、
橋元良太(長崎大学教育学部附属小学校)

はじめに

平成 28 年度、29 度と、附属中学校との共同研究において、伝統的言語文化としての方言を題材にした授業研究に取り組んだ。中学校では、高等学校から始まる古典文法とのつながりと、長崎の伝統文化を取り入れた授業を展開したが、今回は小学校における方言教材の可能性を模索した。

1. 目的

平成 32 年度から全面的に実施される新小学校学習指導要領には、「我が国の言語文化に関する事項」として、「伝統的な言語文化」「言葉の由来や変化」「書写」「読書」が位置づけられているが、中でも(小)第 5 学年及び第 6 学年の「言葉の由来や変化」には、以下のような記述がある。

ウ 語句の由来などに関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言との違いを理解すること。また、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。

そこで本プロジェクトでは、長崎大学教育学部附属小学校 6 年生を対象に、共通語との違いや世代差、言葉の変化を知り、方言の味わいを感じることを目的とした授業を試みた。

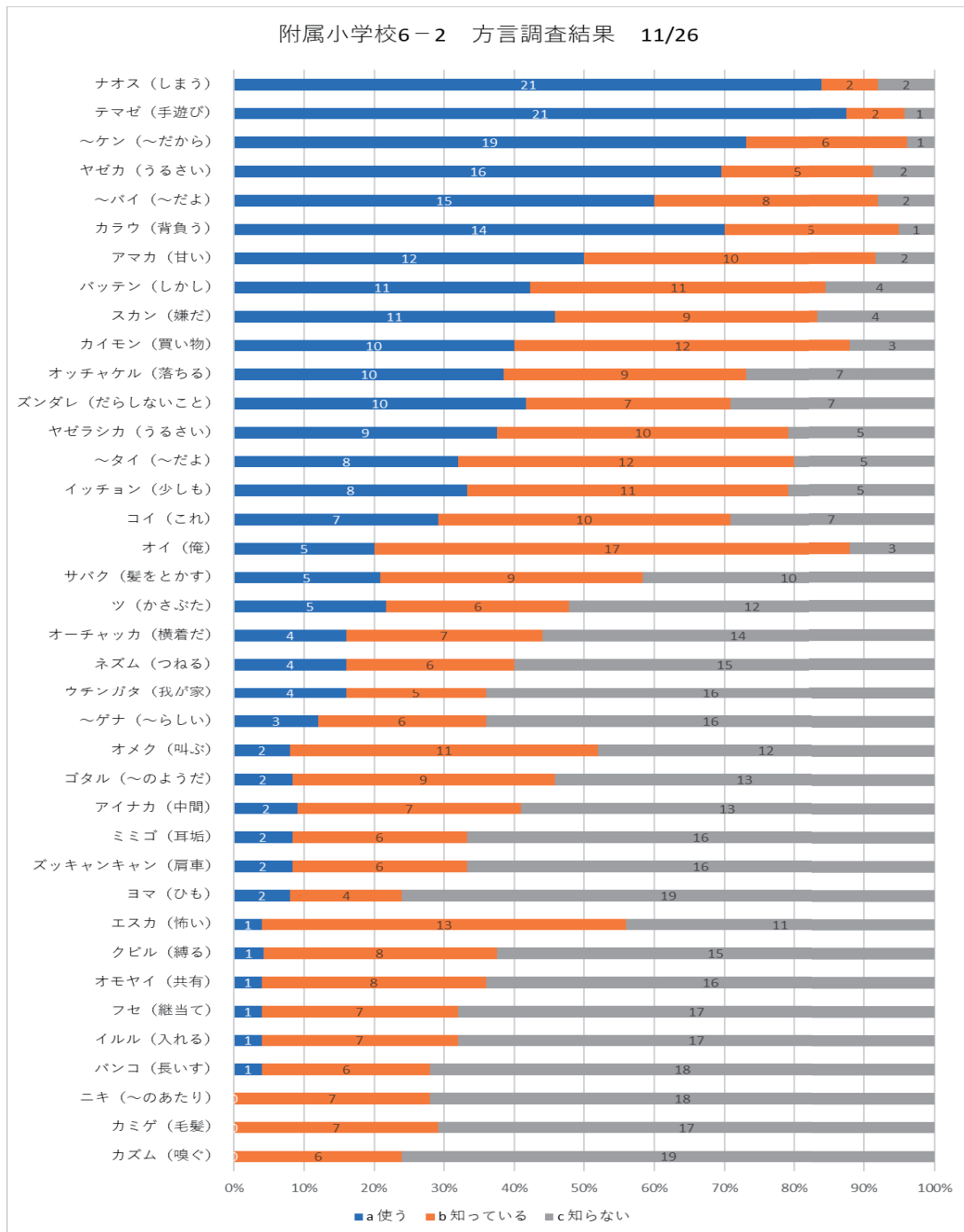
2. 長崎方言の実態調査

授業を行う前に動機付けとして方言調査を行った。子どもたちには、以下の語について、a 使う b 知っている c 知らない のいずれかに○をつけてもらった。語の選定に当たっては、従来より前田が世代別に行っている調査票の中から抜粋したものを使用した。使用頻度の高いものから低いものまで、文法形式や語彙、音訛に関する方言形を各種選び、バランスよく並べたものである。調査後、世代間の比較ができるように考慮した。調査語は以下の 38 語である。

～ゲナ(～らしい) ～ケン(～だから) ～タイ(～だよ)～バイ(～だよ)
アイナカ(中間) アマカ(甘い) イッチョン(少しも) イルル(入れる)
ウチンガタ(我が家) エスカ(怖い) オイ(俺) オーチャッカ(横着だ)
オッチャケル(落ちる) オメク(叫ぶ) オモヤイ(共有) カイモン(買物)

カズム (嗅ぐ) カミゲ (毛髪) カラウ (背負う) クビル (縛る)
 コイ (これ) ゴタル (~のようだ) サバク (髪をとかす) スカン (嫌だ)
 ズッキャンキャン (肩車) ズンダレ (だらしないこと) ツ (かさぶた)
 テマゼ (手遊び) ナオス (しまう) ニキ (~のあたり) ネズム (つねる)
 バッテン (しかし) バンコ (長いす) フセ (継当て) ミミゴ (耳垢)
 ヤゼカ (うるさい) ヤゼラシカ (うるさい) ヨマ (ひも)

上記の項目を調査した結果を集計し、グラフ化したものを次に示す。



使用度 50%以上の語は、高い順に「ナオス」「テマゼ」「~ケン」「カラウ」「ヤ

ゼカ」「～バイ」「アマカ」となっている。続いて「スカン」「ズンダレ」「バッテン」「カイモン」「オッチャケル」「ヤゼラシカ」「イッチョン」「タイ」「コイ」「ツ」「サバク」となり、それ以外は使用度が20%以下の語であった。「ナオス」「テマゼ」「カラウ」「ヤゼカ」は小学校生活で日常的に使う言葉であることから使用度の高いのも納得できる。また、～バイ、理由のケン、形容詞カ語尾など、長崎及び周辺地域でも基本的な方言の文法形式はよく使用されていた。使用度が低い「サバク」「ツ」「フセ」「ウチンガタ」のように主に家庭生活中で使用する事の多そうな語や「オメク」「ネズム」「ゴタル」「ヨマ」「イルル」など、共通語形が普及している方言語彙は、使用が少ないという結果になった。平成27年に行った高年層の調査では、これらの語はほぼ100%使用語彙であったことから、子どもたちの方言語彙が減少している一方で、基本的文法形式はよく保存されているという特徴があることを確認した。

3. 附属小学校での授業内容

本プロジェクトの概要は以下の通りである。本計画は国語科教育の面から平瀬が監修をし、授業は小学校教諭の橋元が中心に行い、前田が方言指導を担当した。

【めあて】友達と感じたことを伝えるために方言らしい言葉を使って俳句を作り句会を開こう。

【授業日程および概要】

	日程	授業者	概 要
第1回	11月26日 1校時	前田	<p><めあて：ことばの由来に関心を持とう。方言を見直そう></p> <p>一般的な長崎方言の語彙の使用状況をアンケート形式で調査する。また、文法、語彙、伝播の方法など方言の様々な特徴について確認する。</p>
第2回	12月3日 2校時	橋元	<p><めあて：句会の仕方を確かめて、試しの句会を開こう></p> <p>全国の小中学生や、高校生が作った俳句を使って試しの句会を開き、句会の仕方を確かめる。また、方言を使った俳句を使って、句会を開いたり、かるたを作ったりする活動の見通しをもつ。</p>
第3回	12月3日 3校時	橋元	<p><めあて：表現を工夫して、様子が友達に伝わる俳句を作ろう></p> <p>教科書の俳句を基に、表現の工夫（比喩、擬音語、擬態語、倒置）とその効果について</p>

			て考えるとともに、表現の工夫を効果的に用いて俳句を作る。
第4回	12月4日 1校時	橋元 (前田)	〈めあて：方言らしい言葉を使って俳句を作ろう〉 方言の取り入れ方について資料を配布して説明する。その後、各自で方言を取り入れた俳句を作る。その際、前時に作った句を方言にしてもよいし、はじめから方言で詠んでもよいということにする。
第5回	12月5日 1校時	橋元 (前田)	〈めあて：作った俳句で句会を開こう〉 作った中から一句選び、読み札に書き出す。方言で悩んでいる子には、適宜アドバイスをする。全員の句を一緒に読み、感想を聞く。
第6回	12月6日 4校時	橋元 前田	〈めあて：友達と俳句を詠み合って感想を伝え合おう〉 全員の方言俳句を示し、一人ひとり順番に他人の句のいい所を聞く。
第7回	12月10日 1校時	橋元 前田	〈めあて：方言かるたの取り札を作り、単元のふりかえりをしよう〉 かるたの取り札を描く。また、第1回で行った方言調査の結果を配布し、子どもたちの方言使用の実態を知らせるとともに、総括として、方言俳句に取組んだ感想を尋ね、方言と共通語の違いや、方言の味わいについて振り返る。

なお、授業実践に先立ち、子供たちに方言への関心を持ってもらうため、約1ヶ月前から教室に方言かるたや方言辞典、方言で書かれた漫画などを配置し、読書の時間などを利用して各自で読んでもらった。

3-1 第1回の授業内容(授業担当:前田)

初回は、本単元の全体のめあてを説明した。その上で、方言とは何かという視点で、身近な長崎方言の特徴や独特の歴史文化について取り上げながらクラス全体で考えた。以下に授業資料の一部を掲載する。

身近な長崎方言を確認しよう

おっちゃける	⇒	落ちる
からう	⇒	背負う
はらかく	⇒	怒る
やぜか	⇒	うるさい
しっぽく	⇒	テーブル
ずつきゃんきゃん	⇒	肩車
つ	⇒	かさぶた
はた	⇒	たこ(凧)
ふせ	⇒	継ぎ当て
ほがす	⇒	穴を開ける

p.1

まず簡単に長崎方言と共通語の比較をして、どういう語が方言であるかを確認した。「からう」や「はらかく」などは方言と気付いていなかった子どももいたようで、活発に反応していた(p.1)。

次に、全国の方言について理解を深めるために、市販されたCDを使って、「桃太郎」の話方言にしたものを聞かせた。

宮城県気仙沼市、大阪市、福岡市、那覇市を取り上げ、方言特有の語形だけでなく、アクセントや音韻などにも地域差があることを学んだ。中でも那覇市の方言は同じ日本語とは思えないという感想を述べる子どももいた(p.2)。

次に、方言のでき方のパターンの一つとして、柳田国男の「方言圏論」を紹介した(p.3)。さらに、長崎方言にも室町時代の中央語に由来するものが多くあることを述べ、具体的な語形をいくつか紹介した。また、室町時代から江戸時代にかけて入ってきた外来文化が影響してできた方言についても説明し、外来語を模したシャレが地域で流行したことにも触れた(p.4)。

全国の方言 桃太郎

(標準語) 昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

- ・ムカスイ ムカスイ アルドゴヌイ オズィンツァンド オバンツァンガ アツタドサ (宮城県気仙沼市)
- ・ムカシムカシ アルトコロニナ オジーサント オバーサンガ オツテント (大阪)
- ・ムカーシムカシ アルトコロニナ オジーサント オバーサンガ オンシャツタゲナ (福岡市)
- ・ムカイムカイ アルトウクルンカイ タンメート ンメーガ メンシエービータン (沖縄)

p.2

都の古いことばが伝わってできた方言

・京都を中心に、水のはもんが広がるように、都から離れれば離れるほど、古い言葉が残っているという考え方。柳田国男が「かたつむり」の方言形を調べ、発見した。



p.3

長崎独特の方言

(外来語が長崎に残ってできた方言)

・バンコ



・ポーブラ



・ギヤマン

・ビードロ



外来語っぽくした江戸時代の「シャレ」

・スグジー

(老けた少年)



p.4

9

<方言の味わい (単語編) > p.5

歩き回る → さるく	あちこち寄り道しながら歩き回る感じ
暑い → ぬっか	温まっている空気や、肌触りまで感じる
いいよ → よかばい	親しい人から優しく受け入れられた感じ
いいと思うよ → よかさー	迷っている時に友達からすすめられた感じ
おちる → おつちやける	落ちてはいけない物が思わず落ちてしまった感じ
だらしない人 → ずんだれ	みっともないイメージがありありと浮かぶ
怒った → 腹かいた	怒ったときのプリプリ感がよくでている

10

方言らしい表現 (長崎弁ならこんな感じ)

- ・ いいよ。 → **よかたい**
- ・ いやなのよ。 → **すかんばい いやっさ。**
- ・ 明日テストがある。 → **明日テストのある。**
- ・ 水を飲む → **水ば飲む**
- ・ 白い。 → **白か。** **楽しい。 → 楽しか。**
- ・ 買った → **買うた** **もらった → もろーた** **食った → 食うた**
- ・ 見える → **見ゆる** **教える → 教ゆる** **食べる → 食ぶる**
- ・ 私の。 → **私んと** **いいの? → よかど?**
- ・ いらぬ → **いらん** **飲まない → 飲まん**

p.6

一通り方言の成立について理解した後、共通語と方言との違いについて考える時間を持った。「方言の味わい」と題したスライド(p.5)は、共通語の表現を方言で言い換えた場合のニュアンスの違いを示したものである。まず、子どもたちに違いがあるかを尋ねたところ、様々な違いを指摘する意見が出て、方言の意味やニュアンスへの理解を深めたようであった。

本時の最後に、長崎方言の特徴的な文法形式を紹介した。方言で俳句を詠む際、方言語彙だけに頼ると、語彙の少ない人にとっては句

作が難しくなるが、方言の助詞や助動詞を使えば簡単に方言らしさを出ることを伝えた。

3-2 第2～3回の授業内容(授業担当:橋元)

第2回は、全国の小中学生や高校生が作った俳句を使って試しの句会を行い、句会の仕方確かめる活動を行った。

よいと思った句を3つ選び、選んだ数を集計してみることで、同じ俳句を読んでも、一人一人の感じ方には違いがあることに気づくことができた。また、選んだ俳句は同じでも、よいと感じた理由には、それぞれ違いがあることに気づくことができた。

第3回は、同じ題材で表現を変えて作られた俳句を比較することで、比喩、擬音語、擬態語、倒置などの表現の工夫を学び、俳句を作る活動を行った。

この時点で、方言を使った俳句を考えることができる子どももいたが、「方言をどのように使えばよいか分からない」「自分が表したいことにある方言が分からない」などという声も多く聞かれた。そこで、第4回の授業に向けて、まずは、自分が表したいことをノートに書き出すよう促した。そうすることで、全員が、どの季節の、どんな様子を俳句で表したいかということについては、考えをもつことができた。

3-3 第4回の授業内容(授業担当:前田、橋元)

<方言俳句を作るためのことば一覧>
(長崎弁を例に) p.7

• (秋冬らしい方言)
 さむか つめたか あつか めっか
 ふるゆっこたっ (震えるようだ) 息の白か
 おくんち もってこーい
 ずっきゃんきゃん はた (凧)
 はた揚げ はしりぐら (競走) がまだせー

教科書の俳句を方言にしてみよう p.8

○歩くたびふわっとまい散る落ち葉かな
 さるくたび ふわっとまい散る 落ち葉ばい

○冬の空夜空に見えるオリオン座
 冬ん空 夜空に見ゆる オリオン座

○木々の群れ葉の服脱いで春を待つ
 木々どんの 葉ん服脱いで 春ば待つ

○羽子板で今年の目標打ち上げる
 羽子板で 今年ん目標ば 打ち上ぐる

方言集を見ながら単語を選んでよし、
語尾 (ばい・たい)、助詞 (ば・の) を使ってもよし

やあらしか もみじのごたる 赤子の手

おくんちで 買うたたこ焼き んまかった

白か息 はあっとかけて 手ばこする p.9

本時は、方言俳句作りに取り組んだ。前時の句作は順調に進んだものの、方言に置き換えるのに苦労している子どもも多くいたことから、まず、コツを説明した。

資料として、季節にあった言葉の方言語彙 (p. 7) と、形容詞のカ語尾、動詞ウ音便、格助詞のノ、バ、終助詞のバイ、所有格のンなど、日常生活で頻繁に使う文法形式を織り込んだ俳句を示した。(p. 8)は、前時に子どもたちが教科書で学んだ共通語の俳句を授業者が方言に変換したもの、(p. 9)はオリジナルの方言俳句である。句の中に音訛や助詞など1箇所でも方言らしい語が混じると、句全体が方言らしくなることを確認した。以上の説明を10分程度聞いた後、各自、俳句に方言を取り入れる方法を考えた。授業者は机間巡視しながら、子どもたちからの相談に応じ、アドバイスをした。

3-4 第5～7回の授業内容(授業担当:橋元)

第5回の授業では、前時に続いて方言俳句を作った。ほとんどの子どもがすぐに慣れて次々と方言句を作っていた。うまくできない子も他の子どもに助けをもらいながら、何とかオリジナルの方言句を作ることができた。各自その中から一句を選んでカードに清書したものを提出すると、授業者がその場でパソコンに入力し、モニターに映し出し、全員で鑑賞した。

以下は、6年2組の子どもたちの方言俳句である。

- 1 気ばつけろ乾燥したらスグジーばい
- 2 大晦日番組争いせからしか

- 3 春うらら桜まいちるやあらしか
- 4 寒か朝ぬっかこたつに猛ダッシュ
- 5 冬の日に約束したとに君は来ん
- 6 雪だるま写真ばとるよとけとった
- 7 桜散るあつか勝負が待っている
- 8 雪だるま道路に作ったらあかんで一
- 9 はちまきば頭にまいて気合い入れ
- 10 除雪車が冬の思い出ば消し去った
- 11 クリスマスサンタば見るまでねむれない
- 12 クリスマスパソコンほしかお母さん
- 13 さむかけんぬっかこたつに入りたい
- 14 はたあげは冬んそよ風なびきよる
- 15 雪だるま作ったばってんおっちゃけた
- 16 冬の来たいっちょんすかんこの寒さ
- 17 息白か窓ば開けると雪景色
- 18 やあらしか一年生と遠足だ
- 19 すいかわりなかなか割れんで食べられん
- 20 夏の夜あもじょが出る宿気持ち冬
- 21 ぬっかもん食べたらにゅーでまだねらん
- 22 ふくろうと夜空ば照らす月光り
- 23 雪光る夜空ん月に照らされて
- 24 鉛筆の「始め」ん合図で動き出す
- 25 雪の降り学校休めるパラダイス
- 26 クリスマス聖歌は町ば包みよる
- 27 クリスマス聖なる夜にふうけもん

第6回の授業では完成した全員の句について、それぞれのいいところについてコメントするという活動を行った。子どもたちの感想としては、

- ・使った方言語彙が面白かった
- ・共感した。「せからしか」は「うるさい」に置き換えられない
- ・感情がよく伝わってくる
- ・使った方言形ならではのニュアンスで、共通語には置き換えられない
- ・長崎弁を2つも入れていてよかった
- ・「なびきよる」という方言の中にも美しさを感じた
- ・「やあらしか（かわいい）」をうまく使っている
- ・比喩表現と長崎方言が相まって良い
- ・「聖なる」と「ふうけもん（お調子者）」という方言が対照的でおもしろい

などがあった。方言語彙の面白さに注目したものもある一方で、方言にも美しさ

や、情感の豊かさ、独特の表現性があることに気付いたようであった。各自、様々な面から方言俳句に対する気づきが述べられ、優れた観察ができたことがわかった。

第7回はかるたの取り札を描く活動をした。また、第1回で行った方言調査の結果を配布し、子どもたちの方言使用の実態を伝えた。最後に総括として、方言を使って句作をした感想を尋ねた。俳句は心の声を五七五に載せて表現するものであるが、家族や親しい人と交わす日常的な方言は、心情をあらわすのに効果的だったことに気づき、そこから方言と共通語の違いや、方言の味わいについて理解を深めたようである。さらに、ことばには、ふさわしい時と場合があることも確認した。敬語や共通語、方言の他にも、若者語、流行語など、様々なことばがあるが、適切に使い分けることで豊かな言語生活になることを伝え、授業を締めくくった。

4. 考察

平成30年度は、附属小学校の協力を得て、方言で俳句を作るという授業に取り組んだ。計画当初、小学生には難しいのではないかという心配から、共同研究者間で何度も話し合いを重ねた。確かに小学生が知っている方言語彙には限りがあり、思いを十分に表現するのは難しいが、助詞や終助詞、条件表現などの文法形式に着目したことによって、句作が容易になることに気付いた。

また子どもたちは、方言独特の味わい深さから、方言は家族や地域とつながる温かい言葉であると気付いたようである。さらに外来語由来の方言からは、中世近世の長崎における異国文化が窺え、郷土の歴史に親しみを感じたようであった。

現代、共通語の普及によって全国どこでも共通語の通じない場所はない。長崎においても、共通語の知識が浸透する中で、若年層になるほど方言語彙の知識が薄れていっているのが現状であるが、子どもたちの方言調査の結果を見ても、基本的な文法形式は定着していた。その面では、方言的要素がしっかり残っており、そこに方言の味わいを求めて句作ができたと考える。

現在、全国各地で方言の衰退が著しく、国立国語研究所においても地域の消滅危機にある方言を残そうとする取り組みがなされるなど、方言への関心は高い。今回の取組で、方言と共通語の違いを説明し、場面に併せた効果的な使い分けや地元の歴史文化と絡めて説明することで、子どもたちの方言への意識が変わったという手応えを感じた。

本プロジェクトは今後も、我が国の言語文化を学習する方言教育の長崎スタイルとして提案し、県内の国語教育の向上につなげていきたい。

購入書一覧

『新長崎弁かるた』 K T N (2セット)

篠崎晃一『ひと目でわかる方言大辞典』あかね書房(2冊)

井上文雄『方言と地図』ピクチャーコミュニケーション(5冊)

吉岡泰夫『九州の方言』ゆまに書房(5冊)

岡野雄一『ペコロスの母に会いに行く』西日本新聞社(5冊)

岡野雄一『ペコロスの母の玉手箱』朝日新聞社(5冊)

星野高士『先生と子どもたちの学校俳句歳時記』学芸みらい社(5冊)

参考文献

『新編新しい国語 六』東京書籍

『国語 六 創造』光村図書

杉藤美代子 1998『日本列島ことばの探検 全国編: マルチメディア方言ライブラリ』富士通

原田章之進 1993『長崎県方言辞典』風間書房

佐藤亮一 1995『九州地方(郷土の研究 方言をしらべよう)』福武書店

坂口至 1998『長崎県のことば』明治書院

井上史雄 2009『方言と地図』フレーベル館

*本研究は平成 30 年度長崎大学教育学部研究企画推進委員会プロジェクトの助成を受けています。